まる新聞
18号　2012年5月27日

まる新聞の発行は毎月20日前後を目途としていますが、前号はぐずぐずと5月に。それはこんなことを考えていたからでした。「東日本大震災の国の追悼式は、なんで東京でしたんだろう」。今号ようやく、おかちゃんのなかで結論が出ました。「やっぱり東北でするべきだったのでは？」。理由はこうです。

㊧今年3月8日の仙石線・東名駅。川崎の猫読者ポッポ君のパパが被災地を訪れ撮影㊨まることおかちゃん。一緒に眠れる幸せを忘れない

「イエローケーキ　クリーンなエネルギーという嘘」
ヨアヒム・チルナー監督。1948年、旧東独生まれ。イエローケーキとは、天然のウラン鉱石を精錬して得られるウランの黄色い粉末。世界最大の鉱山、世界最大の輸送車両、深度世界一の掘削機、世界最凶の放射線。これまでほとんど情報開示がなかった放射性物質の大量発生現場を映し、「本作は危険な状況に対する私なりの抵抗」と語る。（映画パンフレットから）

忘れないために何をするか

追悼式の模様を伝える3月12日付の新聞が、そもそものきっかけでした。畳んだままだったから、写真説明が「東京都千代田区の」までしか読めなかった。国が千代田区でする弔いの式典といえば、「え一っ、靖国神社～？なんでそんなところで！」。実際に行われたのは国立劇場でしたが、勝手に脳内誤解しました。

その一瞬の誤解のせいで、思ったのです。「あれっ。一周忌のお客だって、亡き人の実家や亡くなった場所に伺うのに、なんで、客側の国が死者のもとへ足を運ばないんだろう」。その日、死者のもとに一緒にいたいはずの遺族を、なんでわざわざ離れた東京に行かせるのだろう。

国の言い分は、追悼式は政府の主催で、国はお客にはあたらない、ということなのでしょう。天皇陛下の退院後の体調も理由のひとつかもしれません。メディアの当座の関心事は「平成の次の元号は何だ」でした。

しかし、実際に亡くなり実際に悲嘆にくれた人を優先しない考え方自体が、国民と国との乖離をもたらしています。「平家物語」の昔から、「訪ふ（とぶらう）」と「弔う」は同意でした。大事な人を思い訪ね、悼むのです。

しかし、そんなこんなも、ちょっとした間にすぐ忘れてしまうおかちゃん。

5月の連休に、「イエローケーキ　クリーンなエネルギーという嘘」という映画を見たのは、たまたまでした。

原発の燃料ウランの世界有数の産出国ナミビア、オーストラリア、カナダ、そして旧東ドイツ。この映画は、その4カ国のウラン鉱開発会社、作業員、反対運動家らを追ったドキュメントです。

とにかく、無知であることが怖いです。貧しさと隣り合わせの無知を利用して原発産業はなりたっている。「無知こそがうそのはびこる土壌を作る」。旧東独のウラン鉱で働いた作業員は言います。ここでは40年間、ウランの有害性が偽られてきました。

今、大抵の日本人にとって核、原子力の問題は、福島第一原発の事故とほぼイコールだと思います。そして、おかちゃんは、日本の外に視座を広げることはできていませんでした。

しかし、原発を動かすには、ウランを地下から掘り起こし、商品にする人々がいたのでした。放射能が怖いものだということすら知らずにウランを掘り、運び、手に持ち、被曝している人々。原発の悲劇は、電力会社や国策の犠牲者たる日本人だけでなく、その上流に、地球上の各地に存在していたのでした。

原発を稼働し続けることは、無知をいいことに、他国からウランを求め続け、その陰にある貧しい人たちの被曝を放置することです。

ドイツは、旧東独ビスムート社のウラン採掘停止を政治決断しました。国の情報隠しと闘いながら危険性を調査した人物は言います。「エネルギー源としてウランを輸入するか否かは、市民の責任に関わる倫理的な問題です。産出国の人々の犠牲の上に、自分たちは安全な場所にいてエネルギーを享受している」

ドキュメントのひとつひとつの言葉が、今の日本にとても近いです。ナレーションには、こんな言葉も。

「20年の除染作業の結果は失望させられるものだ。地方紙の3面に、『ビスムートの除染は予定よりも長引く』と記事が載るだろう。だがこうした記事は、全国紙にはまず載らない。2020年完了予定だが、おそらく無理だろう」

福島もじきに忘れられるのでしょうか。水俣が忘れられたように。

そんなことはない、と思いますか？

利益団体は、人が忘れていくことを待ちます。豪国立公園内のウラン採掘を狙う大企業を、環境保護活動を見守る男性は断じます。「企業は待つだけの余裕がある。留まるだけで住民への圧力になる。居座り続けるだけ。それが企業のやり方だ」

脱原発と言っていたのに、1年後の日本は原発再稼働へ向かっています。仙台の商工会議所は、早々に原発稼働を主張しました。

復興が進まないからでしょう。

まる新聞の読者からは、レールも流された宮城県・東名（とうな）駅の写真を提供して頂きました。東京から防府に先日訪ねてきてくれたおかちゃんの元同僚は、陸前高田は1年前と変わってないし、1年後も恐らく変わってないだろう、と嘆きました。

しかし、それはいま原発が動かずに電力が不足しているからではないでしょう。国は、人と地域を「訪ふ」ことを怠り、見るべきことを見過ごして、既に忘れようとしているのではないか。大きな危惧を抱きます。

忘れないために、知ること、遠くの人に思いを致すこと、想像すること。暮らしの中で、自覚していたいです。

発行＝村田まるこ　maru5935@c-able.ne.jp